

ルネ・ヴィヴィアンとラフカディオ・ハーン (2)
—ポール・リヴェルスダール『二重の存在』における「餓鬼」の記述をめぐって—

中 島 淑 恵

富山大学人文学部紀要第59号抜刷

2013年8月

ルネ・ヴィヴィアンとラフカディオ・ハーン (2) —ポール・リヴェルスダール『二重の存在』における「餓鬼」の記述をめぐる—

中 島 淑 恵

はじめに

筆者は先の論考において、ルネ・ヴィヴィアンとエレーヌ・ド・ジュイレン・ド・ニージェルトの共同の筆名であるポール・リヴェルスダールの名で1904年に発表された小説『二重の存在』¹⁾には、ラフカディオ・ハーンが1902年に発表した『骨董』²⁾の影響が深く刻印されていることを指摘してきた³⁾。その際に主に取り上げたのは、第6章「蛍と娘 « Lucioles et mousmés »」における「蛍」をめぐる記述とそこに採用されている俳諧についてであったが、今回分析を試みる第9章「風を食む者 « Les Mangeurs de Vent »」においても、同じ影響関係を明らかに指摘することができる。この章についても、最初にその記述を目にしたときには、それら「餓鬼」をめぐる記述が一体どこに由来するのか皆目見当がつかず、「餓鬼」の記述の典拠であると思われる『正法念処経』⁴⁾との同定作業まで進みながら、そこから先は全く見通しが立たなかった。

しかし、第6章「蛍と娘」の記述が、出典としてその名は示されていないにも関わらず明らかにラフカディオ・ハーンの『骨董』に収められた「蛍」というエッセイからの抜粋であることが判明したことによって、「餓鬼」の記述も同じく『骨董』の「餓鬼」に由来することが明らかになった。ここでは、まず『二重の存在』第9章の本文における「餓鬼」の記述について分析を行ない、それをラフカディオ・ハーンの『骨董』における「餓鬼」のそれと比較して検討することにしたい。

『二重の存在』は、物語の進行にしたがって季節も移ろうように構成されており、第9章は酷暑のロンドンが舞台となっている。今にも道を踏み外さんとしている女主人公ナターシャ・スミルノフに対して、相談相手である物語の狂言回し、アメリカ出身の女流詩人であるヴィヴィアン・リンゼイが道ならぬ恋を戒めようと譬え話を切り出す場面である。物語の進行上は、宙吊りになったかのように場が静止している章なのであるが、この章でヴィヴィアンが語ることは、ナターシャがこれから陥る状況を先取りして物語っているものともいえる。例によって長いエピグラフから始まるこの章の、まずはその内容から確認しておくことにしたい。

1. エピグラフの意味するところ

『二重の存在』の第9章は、ダンテ『神曲』からの引用によるエピグラフで始まる。引用されているのは「地獄篇」のうち第5歌の28から34行目と40から50行目のくだりであり、まず

はダンテの原文が示される。

Io venni in loco d'ognilucomuto,
Chemuggia come fa mar per tempesta,
Se da contrari venti è combattuto.
La bufera infernal, che mai non resta,
Mena gli spirti con la sua rapina,
Voltando e percotendo li molesta...
... E come gli stornei ne portan l'ali
Nel freddo tempo, a chiera larga e piena :
Cosi quel fiato gli spiriti mali ;
Di qua, di là, di giù, di su gli mena ;
Nulla speranza gli conforta mai
Non che di posa, ma di minor pena.
E come igru van cantandolorlai
Facendo in aer di sèlungariga:
Cosi vid'io venir traendo guai
Ombre portate dalla detta briga.

DANTE : Inferno, c. v. 28-34 et 40-50. (p. 83)

少女時代の創作ノートですでに述べている通り⁵⁾、ヴィヴィアンにとってイタリア語は身近な言語なのであって、とりわけダンテの言語をそのまま自由に味読できるという教養的バックグラウンドから、このエピグラフは選ばれているのであろう。「地獄篇」のこのくだりは、キリスト教でいうところの七つの大罪のうち、肉欲の罪を犯した者が暴風に煽られて吹かれ惑っている場面である。このエピグラフのみからでは分からないが、第5歌をよく知る者は、この一節を一瞥しただけで、これが肉欲の罪を犯した者の彷徨う地獄であり、これに続く部分では、ヘレナやクレオパトラへの言及があることが即座に了解されるであろう。その第5歌から、この二つの断片（28行目から34行目、および40行目から50行目）がエピグラフに採用されているのは、『二重の存在』において主題のひとつになっている「肉欲の罪」を示唆するとともに、亡者の魂が「椋鳥」「鶴」など悲痛な声を上げながら飛翔する鳥に例えられているためなのではないかと考えられる⁶⁾。

そしてこのエピグラフは、この小説のほかの章でもそうであるように、「風を食む者」というこの章の標題の謎を解く鍵となっている。もちろん、この「地獄篇」の一部を読んでもまだ

その謎は完全に解ける訳ではなく、読者は謎を抱き続けたまま章の内容へと誘われるのであり、この章のすべてを読んで初めて、標題とエピグラフ、そして章の内容との関係が明らかになるのであるが、少なくともこの章が、地獄と肉欲の罪に関係するものであることが予告されているのだとみなすことはできよう。

『二重の存在』を享受した20世紀初頭のパリのサロンの人々にとっても、ダンテの言語のままに「地獄篇」を味わうのは必ずしも当然の素養であったとはいえなかったのかも知れない。他の章のエピグラフ同様、原文に続いて、おそらくは筆者の解釈によるフランス語訳が示されている。もっとも、ここでは、原文のみが83頁に示され、フランス語訳と本文は84頁に送られているので、エピグラフはあたかも地獄の門のごとく読者の前に謎を掲げ立ちはだかっているかのように思えなくもない。

Je viens dans un lieu muet de toute lumière,
Qui gémissait comme fait la mer dans une tempête,
Lorsqu'elle est combattue par des vents contraires.
La bourrasque infernale, qui jamais ne repose,
Emportait les esprits dans son tourbillon,
Les faisant virer et les frappant et les moquant...
... Et, comme les étourneaux déploient leurs ailes
Au temps froid, en un vol large et plein,
Ainsi en est-il de cet essaim d'esprits mauvais :
D'ici, de là, de dessus, de dessous, [la tempête] les mène,
Nulle espérance ne les reconforte jamais,
[L'espérance] non point du repos, mais d'une moindre peine.
Et, comme les grues chantant leurs lais,
Faisant dans l'air de longues files,
Ainsi je vis venir, traînant leurs douleurs,
Des ombres emportées par cette bourrasque. (p. 84)

いずれにしても、この章の標題である「風を食む者」は、冒頭から何かしら「地獄」と関係のあるものとして示されるが、その意味するところを知るためには内容を読まなければならない。ちなみに、先にも述べた通り、小説全体の展開からいうとこの章は、筋の進行といった見地からはいわば宙吊りの状態におかれているともいえる箇所であり、物語上の事態が何らかの進展を見せるということはない。しかし、この宙吊りの状態におけるコンフィダントとしての

日本通のアメリカ人の女流詩人ヴィヴィアンの忠告によって、女主人公ナターシャは自らがおかれている「肉欲地獄」さながらの状況に思い至るのであって、このことは物語全体の展開にとって重要な伏線となっているのであるといえる。

2. 「虫」の表象の東西

エピグラフに続く本文は、ヴィヴィアンが出し抜けて「キョー・ノ・ハイ・ワ・ガキ・ノ・ヨ・ダ・ネ (*Kyô no hai⁷⁾wagaki no yo da né!*)」(p. 84)と切り出すところから始まる。この呪文のような一言は、日本語を解する読者はともかく、物語中でその場に集う人々にとっては全く意味不明の言葉であり、ナターシャは、「その不整合な⁸⁾詩句の意味を解き明かして (*me révéler le sens de ces syllabes incohérentes*)」(p. 84)欲しいと詩人に懇願する。詩人は「これは私が日本で、蠅の季節によく聞いた感嘆の言葉なのです (*C'est une exclamation que j'ai souvent entendue, au Japon, pendant la saison des mouches*)」(pp. 84-85)と答え、その逐語訳を「蠅どもはなんと餓鬼に似ていることでしょうか (*Comme les mouches ressemblent à des gaki!*)」(p. 85)と告げたのち、「餓鬼」の意味を、「家々の周りを彷徨う飢えた精霊 (*les esprits affamés qui rôdent autout des maisons*)」(p. 86)であると解説する。場面は夏のロンドン、テムズに浮かぶ船の別荘の上である。現実にはそれほどうるさい「蠅」がいるとは思われないが、こう発言したヴィヴィアンは「窓辺の羽音に聞き入って (*suit le vrombissement sur les fenêtres*)」(p. 85)いる様子を見せる。ここではもちろん、「羽音」とあるだけで、必ずしも「蠅」のそれであるかは分からないし、蒸気船の発動音が比喩的に示されているのみであるのかも知れないが、それほどまでに、ここで「蠅」への言及があるのは物語の進行としては突飛な印象を与える。

その気候条件のためか、伝統的にヨーロッパでは「虫」が文学的素材として用いられることはむしろ稀であったといってよい。ヴィヴィアンがここで「日本人は昆虫にほとんど迷信といってもよい敬意を抱いている (*Les Japonais entourent les insectes d'un respect presque superstitieux*)」(p. 85)と説明しているのとは対照的な傾向であるといえる。物語中でサロンに集う人々、ひいては当時のヨーロッパ人にとっては、ヴィヴィアンのこのような説明がなければ、「虫」に文学的感興を覚えるということはほとんど不可能なことだったのではないかと思われる。ヴィヴィアンは「虫」に対する日本人の感性を「彼らはそれ (= 虫) をなんとなく恐れていて、その不可思議な懸念ゆえにそれ (= 虫) を崇めている (*Ils les redoutent vaguement et les vénèrent pour leur mystérieuse inquiétude*)」(p. 85)と続ける。ヴィヴィアンはさらに「彼ら (= 日本人) は蜻蛉や飛蝗を『死者の馬』と名付けている (*Ils ont nommé les libellules et les sauterelles : chevaux des morts*)」(p. 85)ことも語っているが、このことも、日本人にとっては常識であってもヨーロッパ人にとっては想像の外のことなのではないかと思われるのである。

しかしながらこの小説では、小論に先立つ論考で筆者が述べたように、これに先立つ第6章

で「蛭と娘」という表題のもとに「蛭」をめぐる日本人の感性が長々と説明されているのであり、また、それを踏まえた上で第8章の末尾には、当然のことながら日本と関係づけた上で「蛭」と「蚊」への言及が見られる。それはあたかも次章での「蠅」への言及を予告しているかのようである。

« L'Amour est un filet pour prendre les moustiques et les lucioles, comme disait une petite Japonaise de mes amies. Les hommes sont les moustiques et les femmes les lucioles. » (p. 82)

「恋は蚊や蛭を狩るための網なのよ。私の女友達の一人の可愛らしい日本人が言っていたようにね。男たちは蚊で女たちは蛭なのよ。」

これは、妻ジェラルディヌの不在中に夫ラウルと道ならぬ恋に今にも堕ちようとしている物語の主人公であるナターシャが、相談相手であるヴィヴィアンの忠告として思い出す指摘である。「蛭」や「蚊」は、その形質上の特性から容易に「蠅」を連想させると同時に、いずれの語もフランス語では明らかに「蠅」と関連のあるものである。「蛭(luciole)」は別名「火の蠅(mouche à feu)」と呼ばれ、「蚊(moustique)」はそのまま「蠅(mouche)」の指小辞に由来する語だからである。とはいえもちろんここでは、日本の文化伝統が「蚊」や「蠅」に負わせてきたコノテーションは一旦除外して考えておく必要があるだろう。

ところで、一般に「虫」を情緒と結び付けて好ましく記述することの少ないヨーロッパの文学伝統においても、好ましからざるコノテーションの付きまとう昆虫は現に存在するのであって、たとえばここで言及される「蠅」などはその好例である。ヨーロッパの文芸伝統において「蠅」は、近世以降サタンに次ぐ悪魔ベルゼブルの化身として認識されるようになった。『二重の存在』の出版された1904年からゴールドウィングの『蠅の王』出版までは50年を待たなければならぬが、19世紀末においてすでに、「蠅」といえばベルゼブルを思い起こすのはごく自然な連想の流れであったといつてよいであろう。ここで「蛭」「蚊」から「蠅」へと繋げられた形象は、明確に「地獄」や「魔物」へとコノテーションの領域を拡大していることが分かる。「蜻蛉」や「飛蝗」が日本では「死者の馬」と呼ばれるというヴィヴィアンの発言も、これらのコノテーションに連なる記述として了解することが可能になる。

3. 「餓鬼」のさまざまな描写

女性詩人ヴィヴィアンのこのような蠅の解説に興味をそそられたナターシャは、無邪気に「ヴィヴィアン、私に餓鬼について話して下さい(Parlez-moi des gaki, Vivian).」と言って、蠅がその化身であるところの「餓鬼」について詩人にさらなる説明を求める。これに応じてヴィヴィアンはいとも容易く「餓鬼」の種類を列挙してみせる。以下の一つずつ、それらの「餓鬼」の

記述を確認しておきたい。後で比較検討するための便宜として、列挙される順に番号を付しておくことにする。ここで列挙される「餓鬼」は、13種類に及ぶ。また、本文は女流詩人ヴィヴィアンの直接話法の会話体に含まれているが、ここではその内容のみを列挙するため、邦訳を常体で付す。

- ① Les *Jiki-fu-gaki*, les Mangeurs de Vent, sont avides d'espace et de tourments.
ジキ・フ・ガキは風を食む者で、空間と責め苦を渴望している。
- ② Les *Jiki-ké-gaki*, les Mangeurs de Parfums, hâtent l'agonie des fleurs.
ジキ・ケ・ガキは香を食む者で、花の臨終の苦悶を急がせる。
- ③ Les *Jiki-niku-gaki*, les Mangeurs de Chair, sont les fièvres inconnues qui ravagent les malades.
Les brûlures et les frissons de la fièvre intermittente sont l'œuvre de ces *gaki* affamés. Les malades grelottent quand le *gaki* est glacé par le vent du soir. Lorsque le *gaki* se réchauffe, une étrange ardeur parcourt le corps humain qu'il habite et qu'il possède. Enfin, comme un chasseur lassé de carnage, le *gaki* abandonne sa proie et la fièvre disparaît.
ジキ・ニク・ガキは、人肉を食むもので、病人を憔悴させる原因不明の熱である。間歇的な熱による火傷や戦慄は、これら飢えた餓鬼どもの仕業である。この餓鬼が夜の風に凍えると病人は震える。餓鬼の身が温まれば、その餓鬼が宿ってとりついている人体を奇妙な熱が駆け巡る。そしてついには、このような蹂躪に飽きた餓鬼がその獲物を放棄し、熱は消え失せる。
- ④ Les bouches des *Shin-go-gaki* sont minuscules comme un chas d'aiguille.
シン・ゴ・ガキの口は針の穴のように極小である。
- ⑤ Les *Shikko-gaki*, Mangeurs de Cadavres, répandent la peste à travers les cités.
シッコ・ガキは死骸を食むもので、町をめぐる疫病を広める。
- ⑥ Les corps des *Kwaku-shin-gaki* sont pareils à des chaudrons d'eau bouillante.
クァク・シン・ガキの身体は熱湯のたぎる鍋さながらである。
- ⑦ Les *Shinen-gaki*, les Feux Follets, se nourrissent de l'haleine putride des marécages.
シネン・ガキは鬼火で、沼沢の腐敗した呼気を糧とする。

- ⑧ Les *Jiki-kwa-gaki*, les Mangeurs de Flammes, s'incarnent dans les phalènes et les poussent vers la lueur des lanternes.
ジキ・クワ・ガキは、炎を食む者で、蛾の身体に宿り、蛾を燭台の光のもとに向かわせる。
- ⑨ Les *Jiki-ho-gaki*, les Mangeurs d'Enseignement Pieux, recherchent l'ombre des temples, où ils écoutent avec angoisse la parole du prêtre. Le verbe sacré apaise seul leur supplice.
ジキ・ホ・ガキ聖なる教えを食む者で、寺の陰を求め、そこで僧侶の言葉を苦しみながら聞いている。聖なる教えのみがその責め苦しみを和らげる。
- ⑩ Les *Yoku-shiki-gaki* sont de luxurieux fantômes qui, parfois, revêtent un beau corps de femme, versent le saké des festins.
ヨク・シキ・ガキは豪華な亡霊であり、時として美しい女の身体を纏い、宴の酒を注ぐ。
- ⑪ Les *Fujo-ko-hyaku-gaki* se repaissent de la fange des rues. Le supplice des *Fujo-ko-hyaku-gaki* attend ceux-là qui donnent une nourriture malsaine ou repoussante aux religieuses, aux prêtres et aux pèlerins demandant l'aumône.
フジョ・コ・ヒャク・ガキは通りの泥を咀嚼する。フジョ・コ・ヒャク・ガキの責め苦しめは、喜捨を求める尼僧や僧侶および巡礼に不潔でむかつくような食料を与えた者を待ち受けている。
- ⑫ Les *Jiki-man-gaki* dévorent les chevelures artificielles qui recouvrent le chef de certaines idoles. Ceux-là qui ont volé les ornements des sanctuaires deviendront, après leur mort, les frères misérables des *Jiki-man-gaki*.
ジキ・マン・ガキは、仏像の頭を覆う鬘を貪り食う。神域の装飾物を盗んだ者は死後、ジキ・マン・ガキの哀れな兄弟となる。
- ⑬ Les *Ju-chu-gaki*, prisonniers des arbres, sont torturés par le sourd effort de la sève et des racines. Ce châtement est réservé à ceux qui coupent les arbres des cimetières ou des jardins dont l'ombrage environne les pagodes.
ジュ・チュウ・ガキは木の囚われ人で、樹液や根の物言わぬ圧力に苛まれる。この罰は、その蔭が寺院を取り囲む墓地や庭の木々を切った者のみに与えられる。

ちなみに、「餓鬼」の種類について言及があるのは、5世紀頃に成立したとされる『正法念処経』であるが、同書には以下の通り36種類の「餓鬼」の名が列挙されている。ここでは列挙される順に番号を付してそれを確認しておくことにする。

1. 鑊身, 2. 針口, 3. 食吐, 4. 食糞, 5. 無食, 6. 食気, 7. 食法,
8. 食水, 9. 恠望, 10. 食唾, 11. 食鬘, 12. 食血, 13. 食肉, 14. 食香烟,
15. 疾行, 16. 伺便, 17. 地下, 18. 神通, 19. 熾燃, 20. 伺嬰兒便, 21. 欲食,
22. 住海渚, 23. 執杖, 24. 食小兒, 25. 食人精氣, 26. 羅刹, 27. 火爐燒食, 28. 住不淨巷陌,
29. 食風, 30. 食火炭, 31. 食毒, 32. 曠野, 33. 住塚間食熱灰土,
34. 樹中住, 35. 四交道, 36. 殺身

このうち先に見た『二重の存在』のアルファベットによる発音の転写とその属性の記述から、『正法念処経』に列挙されている「餓鬼」と同定できるのは、以下の通りであろう。

『二重の存在』	『正法念処経』
① ジキ・フ・ガキ (<i>Jiki-fu-gaki</i>)	29. 食風
② ジキ・ケ・ガキ (<i>Jiki-ké-gaki</i>)	6. 食気
③ ジキ・ニク・ガキ (<i>Jiki-niku-gaki</i>)	13. 食肉
④ シン・ゴ・ガキ (<i>Shin-go-gaki</i>)	2. 針口
⑤ シッコ・ガキ (<i>Shikko-gaki</i>)	15. 疾行
⑥ クァク・シン・ガキ (<i>Kwaku-shin-gaki</i>)	1. 鑊身
⑦ シネン・ガキ (<i>Shinen-gaki</i>)	19. 熾燃
⑧ ジキ・クァ・ガキ (<i>Jiki-kwa-gaki</i>)	30. 食火炭
⑨ ジキ・ホ・ガキ (<i>Jiki-ho-gaki</i>)	7. 食法
⑩ ヨク・シキ・ガキ (<i>Yoku-shiki-gaki</i>)	21. 欲食
⑪ フジョ・コ・ヒャク・ガキ (<i>Fujo-ko-hyaku-gaki</i>)	28. 住不淨巷陌
⑫ ジキ・マン・ガキ (<i>Jiki-man-gaki</i>)	11. 食鬘
⑬ ジュ・チュ・ガキ (<i>Ju-chu-gaki</i>)	34. 樹中住

このように対照してみると、『正法念処経』で36種類列挙されている「餓鬼」が、なぜ『二重の存在』では13種類に絞られているのか、そしてなぜこの13種類の「餓鬼」が選ばれ、他のものは選ばれなかったのか、あるいは、『二重の存在』のアルファベットによる発音の音写が必ずしも『正法念処経』の漢字と一致していないのはなぜか、という問題が立ち現われてくる。そしてこれらの謎は、ラフカディオ・ハーンの『骨董』における「餓鬼」の記述をここで媒介項として比較検討の対象とすることで、かなりの程度まで解明されるように思われるのである。

4. ラフカディオ・ハーン『骨董』における「餓鬼」の描写

「餓鬼」の第1章では、「虫」が輪廻転生の一段階としての存在のあり方であることが述べられ、因果応報に基づいて、われわれが動物や虫、あるいは妖怪の姿をとってこの世に再び生を享ける可能性が述べられている。このうち妖怪の説明として言及されるのが「餓鬼(gaki)」なのであって、次のような注が付されている。

The world of *gaki* is the Japanese Buddhist rendering of the Sanscrit term “*preta*,” signifying a spirit in that circle or state of torment called the World of Hungry Ghosts. (p. 184)

「餓鬼」道は、「飢えた亡霊の世界」と呼ばれる責め苦の状態あるいはサイクルに置かれた精霊を意味するサンスクリット語の「プレータ」の日本仏教における呼称である。

このような記述に続いて、蝶が亡妻の化身であったり、夜の蟋蟀の鳴き声が亡者の嘆きであったりする例が引き合いに出された後で唐突に、「蜻蛉や飛蝗は死者の馬である (dragon flies and grasshoppers are the horse of the dead.)」(p. 185)との記述が現れる。これは『二重の存在』にも言及があるくだりである。

これに続いて、『二重の存在』にも言及のあった「蠅」に関する記述が登場する。

Flies, on the other hand, are especially indentified with the world of hungry ghosts. How often, in the season of flies, have I heard some persecuted toiler exclaim, *Kyō no haiwa, gaki no yo da né?*” (The flies to-day how like gaki they are!) (p. 185)

蠅はまた一方で、とりわけ飢えた亡霊の世界と特に同一視される。蠅の季節にどれほど頻繁に人がうんざりしたような声で、「キョー・ノ・ハイ・ハ・ガキ・ノ・ヨ・ダ・ネ」(今日の蠅はなんと餓鬼に似ていることか)と言うのを聞いたことだろうか。

ここに引用されている叫びは明らかに、先に見た『二重の存在』のヴィヴィアンの台詞と同一のものであり、意味が同じであるというだけでなく、アルファベットによる発音の転写もまた、「今日(Kyō)におけるoの長音記号が棒線(ō)かアクサン・シルコンフлекс(ô)か、という違いのみで、「蠅(hai)」の記述法も含めて全く同一といってよいものである。そして、長音記号の違いも、前掲拙論で述べたように、『二重の存在』の第6章該当箇所において、ハーンでは棒線で示されていたものが規則的にアクサン・シルコンフлексに置き換わっていることをここでも再確認すれば事足りる異同なのである。

このあと『骨董』では、六道の紹介の後『正法念処経』への言及がなされ、その中に36の「餓鬼」の種類が列挙されていることが述べられているが、例として挙げられているのはそのすべ

てではない。以下に、『骨董』で例示されている「餓鬼」の種類についてそのすべての記述を確認しておきたい。また、あとで『二重の存在』および『正法念処経』のそれと比較するために、列挙される順番に番号を付しておくことにする。まずは、「その描写がどうにも漠然としている (Perhaps the descriptions are vague in the case of such spirits as…)」(p. 189)ものとして名前とその直訳のみが紹介される「餓鬼」について言及がある。

- ① the *Jiki-ketsu-gaki*, or Blood-suckers;(p. 189)
ジキ・ケツ・ガキ, すなわち血を吸う者
- ② the *Jiki-niku-gaki* or Flesh-eaters;(p. 189)
ジキ・ニク・ガキ, すなわち肉を食う者
- ③ the *Jiki-da-gaki*, or *****-eaters;(p. 189)
ジキ・ダ・ガキ, すなわち*****を食う者
- ④ the *Jiki-fun-gaki*, or *****-eaters;(p. 189)
ジキ・フン・ガキ, すなわち****を食う者
- ⑤ the *Jiki-doku-gaki*, or Poison-eaters;(p. 189)
ジキ・ドク・ガキ, すなわち毒を食う者
- ⑥ the *Jiki-fu-gaki*, or Wind-eaters;(p. 189)
ジキ・フ・ガキ, すなわち風を食う者
- ⑦ the *Jiki-ké-gaki*, or Smell-eaters;(p. 189)
ジキ・ケ・ガキ, すなわち匂いを食う者
- ⑧ the *Jiki-kwa-gaki*, or Fire-eaters (perhaps they fly into lamps?);(p. 189)
ジキ・クワ・ガキ, すなわち火を食う者 (たぶんランプの中に飛んで入る)
- ⑨ the *Shikkō-gaki*, who devour corpses and cause pestilence;(p. 189)
シッコウ・ガキ, すなわち死骸をむさぼり, 疫病をもたらす者

- ⑩ the *Shinen-gaki*, who appear by night as wandering fires;(p. 189)
シネン・ガキ, 鬼火として夜に現れる者
- ⑪ the *Shin-ko-gaki*, or Needle-mouthed;(p. 189)
シン・コ・ガキ, すなわち針の口を持つ者
- ⑫ the *Kwaku-shin-gaki*, or Chaudron-boiled, --- each a living furnace, filled with flame that keeps the fluids of its body humming like a boiling pot.(pp. 189-190)
クァク・シン・ガキ, すなわち煮えたぎった鍋, 煮えたぎった鍋のようにその中で肉体が液体となつてぐらぐら沸いている生きた坩堝のような者

次に挙げられる「餓鬼」は『正法念処経』において、さらに明確な性格が付与されているものであり、これらの「餓鬼」は、「蛾(moths)」や「蠅(flies)」「甲虫(beetles)」「毛虫(grubs)」「芋虫(worms)」などの「虫」が形象化されたものであるとハーンは述べている。

- ⑬ *Jiki-man-gaki*. --- These gaki can live only by eating the wigs of false hair with which the status of certain divinities are decorated... Such will be the future condition of person who steal objects of value from Buddhist temples.(p. 190)
ジキ・マン・ガキ — これらの餓鬼は仏像の頭を飾っている鬘の偽の紙を食べることによってのみ生きられる。仏教寺院から価値ある物を盗んだ者をやがて待ち受ける条件である。
- ⑭ *Fujō-ko-hyaku-gaki*. --- These gaki can eat only street filth and refuse. Such a condition is the consequence of having given putrid or unwholesome food to priests or nuns, or pilgrims in need of alms.(p. 190)
フジョー・コ・ヒャク・ガキ — これらの餓鬼は通りの泥芥によってのみ生きることができる。これは、喜捨を求めてきた僧侶や尼僧,あるいは巡礼に腐敗した,あるいは変質した食べ物を与えた者に巡ってくる運命である。
- ⑮ *Cho-ken-jū-jiki-netsu-gaki*. --- These are the eaters of the refuse of funeral-pyres and of the clay of graves... They are the spirits of men who despoiled Buddhist temples for the sake of gain.(p. 190)
チョ・ケン・ジュウ・ネツ・ガキ — これらは火葬の薪屑や墓の土を食べる者であ

る。このものどもは、仏教寺院から欲に煽られて盗みを働いた者の魂である。

- ⑩ *Ju-chū-gaki*. --- These spirits are born within the wood of trees, and are tormented by the growing of the grain... Their result of having cut down shade-trees for the purpose of selling the timber. Persons who cut down the trees in Buddhist cemeteries or temple-grounds are especially likely to become *ju-chū-gaki*. (p. 190)

ジュ・チュー・ガキ — これらの魂は木の幹の中に生まれ、木の組織が成長するにつれて苦しめられる。この者どもは、材木を売る目的で日陰を作っていた木を切り倒す者の末路である。仏教の墓地や寺の敷地の木を切ったものは特にこのジュ・チュー・ガキになる傾向がある⁹⁾。

以下に列挙されるこれ以外の「餓鬼」は、その特質が「虫」に同定することは不可能なものであり、ここにジキ・ホー・ガキとヨク・シキ・ガキが分類されている。

- ⑪ *Jiki-hō-gaki*, or “Doctrine-eaters.” These can exist only by hearing the preaching of the Law of the Buddha in some temple. While they hear such preaching, their torment is assuaged; but at all other times they suffer agonies unspeakable. To this condition are liable after death all Buddhist priests or nuns who proclaim the law for the mere purpose of making money... (pp. 191-192)

ジキ・ホー・ガキ、すなわち仏典を食らう者。これらの者は、どこかの寺でブツダの教えを聞くことよってのみ生きられる。そのような説教を聞いているときのみ彼らの責め苦は和らぐのである。しかしそれ以外の時は筆舌に尽くしがたい苦痛を強いられる。このような境涯には、金を儲けるためにのみ仏法を説いて回った仏僧や尼僧が陥りやすいのである。

- ⑫ Also there are *gaki* who appear sometimes in beautiful human shapes. Such are the *Yoku-shiki-gaki*, spirits of lewdness, --- corresponding in some sort to the *incubi* and *succubi* of our own Middle Ages. They can change their sex at will, and can make their bodies as large or as small as they please. It is impossible to exclude them from any dwelling, except by the use of holy charms and spells, since they are able to pass through an orifice even smaller than the eye of a needle. To seduce young men, they assume beautiful feminine shapes, —often appearing at wine parties as waitresses or dancing girls. (p. 192)

あるいはまた、時として美しい人間の姿となって現れる餓鬼もいる。それはヨク・シ

キ・ガキといって、性欲の霊であるが、われわれ（西洋の）中世の男性夢魔や女性夢魔のような類のものである。彼らは思うままに性別を変え、また望む通りに大きくも小さくもなる。彼らを家から追い出すのは、何らかの聖なる魔法や呪文によらなければならない。というのも針の穴よりも小さな穴でも通り抜けることができるからだ。若い男を誘惑するためには、彼らは美しい女性の形をとる。そうして、酒宴に酌婦や踊り子となって現れるのである。

この、「餓鬼」の列挙の最後尾となるヨク・シキ・ガキについては、とくに詳しくその特質が述べられている。このような境涯は「人間であった前世における淫欲の結果(a consequence of lust in some previous human existence)」(p. 192)なのであるが、その「超自然的な神通力(The supernatural powers)」(p. 192)は、悪しきカルマも打ち負かすことのできない良きカルマの結果(results of meritorious Karma which the evil Karma could not wholly counter balance)」(p. 192)なのだとも説明されている。また、この「餓鬼」は「虫の形をとり得る(they may take the form of insects)」(pp.192-193)ことも述べられている。すなわち、人間でもその他の動物でも自由自在に姿を変え、「空間をあらゆる方向に自由に飛ぶことができる(fly freely in all directions of space)」(p. 193)のであり、「すべての虫が必ずしも『餓鬼』ではない(All insects are not necessarily gaki)」(p. 193)ものの、「ほとんどの『餓鬼』はその目的に応じて虫の姿をとることができる(most gaki can assume the form of insects when it serves their purpose)」(p. 193)のだという。この最後の餓鬼についてのとりわけ詳細かつ特権的な記述と「虫」への言及は、ハーンの「餓鬼」観と「虫」をどのようなものとしてとらえていたのか、を考察する上で興味深い材料を提供してくれているように思える。

5. 『二重の存在』および『骨董』における「餓鬼」の描写の比較

それでは以下に、『二重の存在』において言及されていた13種類の「餓鬼」と『骨董』における18種類の「餓鬼」がその典拠である『正法念処経』と比べてどのように配置されているのかについて確認しておくことにしたい。

『二重の存在』	『骨董』	『正法念処経』
① ジキ・フ・ガキ(<i>Jiki-fu-gaki</i>)	⑥ <i>Jiki-fu-gaki</i>	29. 食風
② ジキ・ケ・ガキ(<i>Jiki-ké-gaki</i>)	⑦ <i>Jiki-ké-gaki</i>	6. 食気
③ ジキ・ニク・ガキ(<i>Jiki-niku-gaki</i>)	② <i>Jiki-niku-gaki</i>	13. 食肉
④ シン・ゴ・ガキ(<i>Shin-go-gaki</i>)	⑪ <i>Shin-ko-gaki</i>	2. 針口
⑤ シッコ・ガキ(<i>Shikko-gaki</i>)	⑨ <i>Shikkō-gaki</i>	15. 疾行
⑥ クァク・シン・ガキ(<i>Kwaku-shin-gaki</i>)	⑫ <i>Kwaku-shin-gaki</i>	1. 鑊身

⑦ シネン・ガキ (<i>Shinen-gaki</i>)	⑩ <i>Shinen-gaki</i>	19. 熾燃
⑧ ジキ・クァ・ガキ (<i>Jiki-kwa-gaki</i>)	⑧ <i>Jiki-kwa-gaki</i>	30. 食火炭
⑨ ジキ・ホ・ガキ (<i>Jiki-ho-gaki</i>)	⑩ <i>Jiki-hō-gaki</i>	7. 食法
⑩ ヨク・シキ・ガキ (<i>Yoku-shiki-gaki</i>)	⑩ <i>Yoku-shiki-gaki</i>	21. 欲食
⑪ フジョ・コ・ヒャク・ガキ (<i>Fujo-ko-hyaku-gaki</i>)	⑭ <i>Fujō-ko-hyaku-gaki</i>	28. 住不浄巷陌
⑫ ジキ・マン・ガキ (<i>Jiki-man-gaki</i>)	⑬ <i>Jiki-man-gaki</i>	11. 食鬻
⑬ ジュ・チュ・ガキ (<i>Ju-chu-gaki</i>)	⑯ <i>Ju-chū-gaki</i>	34. 樹中住
	① <i>Jiki-ketsu-gaki</i>	12. 食血
	③ <i>Jiki-da-gaki</i>	10. 食唾
	④ <i>Jiki-fun-gaki</i>	4. 食糞
	⑤ <i>Jiki-doku-gaki</i>	31. 食毒
	⑮ <i>Cho-ken-jū-jiki-netsu-gaki</i>	33. 住塚間食熱灰土

このような比較対象からすぐに分かるのは、『二重の存在』で列挙されている「餓鬼」はすべて『骨董』で言及されている「餓鬼」であり、その逆はないこと、すなわち、『二重の存在』における「餓鬼」の記述は、『正法念処経』を直接の典拠としているのではなく、前掲拙論で「蜚」をめぐる記述について筆者が述べたのと同様に、ここでもハーンの『骨董』を参照している可能性が限りなく高いことであるといえる。この限りなく事実に近い仮説は、両者に現れるそれぞれの「餓鬼」の発音の音写が、唯一つの例外（「針口餓鬼」の音写が、『骨董』では「シン・コ」と清音になっているのに対して、『二重の存在』では「シン・ゴ」と濁音になっていること）を除いて、長音に至るまで同一であること（もちろん長音記号については、『骨董』では棒線になっているものが『二重の存在』ではアクセント・シルコンプレックスに規則的に置き換わっているのであるが）によってもさらに補強されているように思われる。

それでは、『骨董』で言及されながら『二重の存在』では採用されなかった5種類の「餓鬼」は、いかなる理由により除外されたのであろうか。まず考えられるのは、『骨董』における③の *Jiki-da-gaki*（食唾餓鬼）と④の *Jiki-fun-gaki*（食糞餓鬼）についてであるが、これはその説明が、『骨董』でそれぞれ、③については「すなわち*****を食う者(or *****-eaters)」(p. 189)、④については「すなわち*****を食う者(or ****-eaters)」(p. 189)と、伏字になっているためではないかと思われる。ハーンがこの箇所を伏字にしたのは、おそらく「唾」「糞」といった言葉が、活字にするのをためられるような穢い語に思えたからなのではないかと思われるが、日本語を解さないヴィヴィアン＝リヴェルスダールには、そのまま意味不明の「餓鬼」と映ったためであるかも知れないのである。それ以外の「食血餓鬼」と「食毒餓鬼」については、その意外性のなさと、すでに『骨董』においてもごく簡単に触れられているのみであるのかも知れない。また、「住塚間食熱灰土餓鬼」についても、その排除の理由はよくわからないが、

既に採用された他の「餓鬼」と似通った特質があると看做されたためか、キリスト教上の教義では深い意味のある13という数字に拘ったためなのではないかと思われる。

そして、ハーンが『骨董』においてとりわけ詳しく述べていた「欲食餓鬼」については、『二重の存在』では記述こそ簡素ではあるが、エピグラフにダンテ『神曲』「地獄篇」の「色欲地獄」を掲げることによって、やはり特権的な地位を与えていると看做することができるのではないかと判断できる。そして、そのダンテの色欲地獄すなわち突風地獄と、仏教の餓鬼道を結ぶものとして、「蠅」の存在と「風を食む者」すなわち「食風餓鬼」の存在がクローズアップされるのではないかと思われるのである。

6. おわりに

『二重の存在』第8章は、このようなさまざまな「餓鬼」の列挙の記述の後に、女性詩人ヴィヴィアンが観音に帰依し、仏教の教義を極めていくのかという問答が続く。無邪気に問いかけるナターシャにヴィヴィアンは答えをはぐらかしながら応じ、両者の間には沈黙が押し掛かる。やがて沈黙を破るのはヴィヴィアンの方であり、ヴィヴィアンは「風が吹き抜けているわ。(中略) これは旋風の始まりね。今宵は風を食む者どもも幸せでしょう (L'air franchit, [...] C'est le commencement de la bourrasque. Les Mangeurs de Vent seront heureux ce soir)」と静かに語る。この章を貫く地獄の熱風と、それに暗示される今後の女主人公ナターシャの運命、そして「風を食む者ども」に対する女性詩人ヴィヴィアンの、共感めいた、というよりも愛情のようなものも伝わってくる章の末尾であるといえる。

このようにして見てくると、ヴィヴィアン＝リヴェルスダールは確かに多くのものをハーンの『骨董』から得ているが、それを自らの創作の一部とするため、咀嚼し、配列し直して作品に取り込んでいるのであって、そこでは、単なる借用や盗作といった表現では表しきれない新たな文学上の再創造が実現されているのだと考えることができる。それはまた、純粋に文学的な問題だけでなく、仏教的要素とキリスト教的解釈を正面から対比させて新たな宗教的感興を編み出そうとするヴィヴィアン＝リヴェルスダールの心的態度を反映させたもののようにも思われる。このことは、英国国教会を信奉する家に生まれ、ユダヤ教から仏教を経てカトリックに至ったヴィヴィアンの精神的彷徨の過程をたどる上でも重要なことであるといえるが、それ以上に、ラフカディオ・ハーンが同時代のヨーロッパ人の心性のありように、意外に深い影響を及ぼしているのではないかと考える判断の根拠を与えてくれているようにも思われるのである。

注

- 1) 『二重の存在』については、Paule Riversdale, *L'Être double*, Alphonse Lemerre, 1904. を参照し、以下同書からの引用については頁数のみを示す。また、邦訳を付した場合は拙訳による。
- 2) 『骨董』については、Lafcadio Hearn, *Kotto*, Cosimo classics, New York, 2007 を参照し、以下同書からの引用についても頁数のみを示す。また、邦訳を付した場合は拙訳による。
- 3) 第6章「蛍と娘」におけるラフカディオ・ハーンの影響については、拙論ルネ・ヴィヴィアンとラフカディオ・ハーン—ポール・リヴェルスダール『二重の存在』における蛍の表象をめぐって①—、富山大学人文学部紀要第56号、2012年を参照のこと。
- 4) 10世紀に成立したとされる源信『往生要集』の地獄および極楽の記述の元となったといわれる、5世紀頃に成立した地獄および餓鬼の詳細が述べられている書物。なお、富山大学附属図書館所蔵のヘルン文庫（八泉八雲旧蔵書）に『正法念処経』の版本があることから、ハーンも何らかのかたちでこの書物を参照していることは明らかである。
- 5) ルネ・ヴィヴィアン少女時代の創作ノート（手稿）については、フランス国立図書館蔵マイクロフィルム NAF26579 の14頁左側に次のような記述がある。Et j'admire beaucoup le Dante. Ayant le bonheur de pouvoir le lire en italien, je puis bien apprécier l'harmonie et la musique de son incomparable : « poeza rima ». J'admire l'élégance de son style, la beauté de ses métaphores, presque toujours tirées d'objet de notre vie. (そして私はダンテに深く心酔する。イタリア語でそれを読むことのできる幸運を持ち合わせた私は、その比類なき「韻文詩」の旋律と音楽をしっかりと味わうことができる。私はその文体の華麗さやほとんど常に私たちの日常生活の事物から採用された隠喩の美しさを賞賛する)。
- 6) 参考までに、平川祐弘訳によって該当箇所の和訳を確認しておきたい。「私はいまやって来たのだ。／ここではいっさいの光は黙し、／その叫びは、嵐の日に逆風に叩かれて／海が発する轟きに似ていた。／地獄の颯風は、小止みなく／亡霊の群れを無理強いに駆り立て、／こづき、ゆさぶり、痛めつける。／／寒い時候に鶴は羽搏きながら／空一面に群がって飛んで行くが、／ちょうど同じように罪ある魂の群れが／風のまにまに上下左右へ吹きまわされている。／いかなる希望も慰めもない、／休息も減刑も期待できない。／鶴が哀歌を歌いつつ／空に長く列をなして飛ぶように／颯風に運ばれた亡霊が／苦悩の呻きを洩らしつつ近づいて来た。」ダンテ『神曲 地獄篇』平川祐弘訳、河出文庫、2008年。
- 7) ここでも「ハイ」のアルファベットによる音写は hai であり、フランス語の発音では「へ」と看做されかねないことも付言しておく。
- 8) ここでナターシャがこの詩句を「不整合な (incohérente)」と形容しているのは、明らかにフランス語では稀な子音が連続しており、また音節ごとに母音で終わっているためではないかと思われる。いずれにしてもこの言葉がフランス語を解する者にとっては耳慣れない、むしろ耳障りな音として感知されていることが分かる。
- 9) 『骨董』この後に注としては例外的に長い紙幅を割いて、木の精に関する榎の木の逸話が語られている。木の精霊についてハーンが並々ならぬ関心を抱いていたことの証左であろう。

本論文は、科学研究費補助金の助成を受けた研究（課題番号24520343）の成果の一部である。